

氏名	ラ エイショウ 羅 永 祥
学位の種類	博士(文学)
学位記の番号	甲第 211 号
学位授与年月日	令和年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則
学位論文の題目	JSP 視点から見た CA のための日本語教育研究 —台湾における航空人材育成再考—
論文審査委員	主 査 上田 和子 副 査 木下 りか 副 査 野畑 理佳

論文内容の要旨

1. 研究の背景

2011年の「台日オープンスカイ」という航空自由化協定改定に伴い、来台日本人旅客数が大きく成長する流れが生まれた。それに応じて、航空会社は日本人乗客への言語サービス向上のため、キャビンアテンダント（以下 CA と略す）の日本語訓練コースを12時間ほど行っている。事前の日本語能力有無を問わず全員が訓練に参加するが、修了後に日本語の再研修は設けられておらず、同コースは新人 CA 向けの1回限り、限られた時間数で機内のあらゆる場面の日本語を習得することを求めるという矛盾を内包している。

筆者は、CA としての勤務経験を通して多くの CA が社内日本語訓練コースを受けたにもかかわらず、日本語で業務を遂行する様子が見られない現実、CA のための日本語研修の背景に何があるのか、様々な疑問を抱くようになった。一方、CA のための日本語教育を JSP 教育として見た場合、学習目的、学習ニーズ、時間等の要素には一般的な日本語教育とは異なる特徴があることが指摘されている。

そこで、筆者は CA 段階における日本語教育の現状把握や、現役 CA のための日本語コースを構築するため、本研究で以下 1) 2) の課題を取り上げ明らかにすることにした。

1) 現状調査

- ①台湾と中国における JSP 研究動向分析
- ②大学教育における「候補 CA」段階のコース分析、および「新人 CA」段階の教材分析等による現状把握

2) 「現役 CA」のための日本語コース構築に向けた調査

①「現役 CA」段階対象のニーズ調査

②オンライン日本語教材分析、および待遇表現等習得すべき言語知識の調査

2. 調査と結果

1) 現状調査

JSP 研究における現状調査結果では、台湾であれ中国であれ、主に「学術」、「商業」、「観光」が中心で、「航空」の JSP 研究本数は僅かであることが挙げられる。

大学教育の「航空日本語科目」では、「言語」「非言語」学科を問わず各学科で「日本語」はすべて自由選択となっていて核心科目になっているとは言えない。「非言語学科」では、「日本語+ α 」というより「英語+ α 」の傾向があり「言語学科」でも「日本語+ α 」を教育方針としているが、航空日本語科目は「 α 」の中の唯一の科目ではない。さらに教師の専門性や業務経験の有無などの背景により教材の選定が左右されることなど、業務当事者の関与が教育に影響を与えていることがわかった。

航空会社の「新人 CA」研修で用いられる『日本語の学習』という日本語訓練教材を分析した結果、全体構成は「トピック」と「付録」だけの大項目によって構成されており、「トピック」ごとにいくつかの「単語」、「重要表現」、「会話」の小項目を配置しているが、トピックによってはすべての小項目が含まれるわけではなく、バランスに欠けることがわかった。単語の配置から見ると、N5・N4 の単語レベルが多く占めているが、N3 から、N1 レベルさらに試験級外までの広がり各トピックに散見される。文法学習では「いかがですか」「～お～ください」の文型表現の出現頻度が多くを占めている。『みんなの日本語』と対照すると、文型表現の学習順序は積み上げ式ではなく、場面優先でランダムに配置する特徴が現れている。発話機能では「尋ねる」と「返事」、「声かけ」の発話機能の出現頻度が高い。「聞く」「話す」能力が求められるものの、実際の機内業務を熟知する当事者の関わりが十分にあると言えない。

2) 「現役 CA」のためのコース構築にむけた調査

「現役 CA」段階対象のニーズ調査では、5名の現役 CA に協力を得てインタビュー調査をし、それを KJ 法で分析した。当時未習者だった協力者にとって、新人 CA 日本語訓練コースの印象は、「暗記」、「平仮名が書きにくい」、「五十音は全然だめ」等の苦痛の記憶が多いものの、「訓練効果」に対しては「ある程度効果がある」と述べている。「継続学習への動機」では、現役 CA は単に「機内」という公的場面でなく、「旅行」、「ドラマ鑑賞」という私的場面でも日本語との接触があり、日本語学習への動機が見られる。そして「コースへの期待」では、「宿題」、「テスト」の配置の必要性については協力者の意見が分かれていた。

3. 考察

以上の結果から明らかになったのは、CA のための日本語教育は、職務経験の段階によって、「候補 CA」「新人 CA」「現役 CA」に分類することができ、それぞれに特色や課題があることである。まず「候補 CA」段階では「航空日本語」科目の自由選択履修、教師

の専門領域や実務経験などが、CAのための日本語教育への構築や研究に影響を及ぼしていることが挙げられる。「新人CA」段階で用いる社内研修の日本語教材には、一般的教材の構成や単語、文型表現の配置とは異なって、専門日本語つまり機内サービス場面の特定日本語表現を配置しているのが特徴である。しかし、日本語未習の新人CAにとっては、限られた時間にあらゆる日本語表現や単語を習得し、すべてに対応するというのは容易ではない。一方、「現役CA」は日々業務現場で現実の日本人や日本語に触れているだけでなく、業務経験が長くなるにつれ、業務の一環で日本に滞在する機会も増え、公的私的の様々な場面で日本語使用経験を持つようになる。それによって総じて継続学習ニーズが高い。ただし、「現役CA」のための日本語コースは現在なく、その構築についての調査では、オンライン学習も含めた手段についての意見は、個人により分かれている。

「現役CA」の調査から、CAという職業についてさらに考察することができる。この職業は国境を越えて業務を行うが、機上だけでなく必然的に訪問先滞在も含まれ、そこで外国語使用を経験する。CAは英語を中心とする複数の外国語を駆使する複言語使用者であり、言語能力を活用して乗客へのホスピタリティーを提供するという点において、職業的自尊心（矜持）を醸成することもある。日本語については、多様で現実的な日本語使用の場面（読み書きや会話、方言、待遇表現など）と出会っており、業務時間を経るとともに日本語の経験も積み重なることから、継続学習への動機は高い。しかし、CAという職業の勤務体制は時間的に非常に不規則で、常にシフト調整があり、世界各地への移動を伴う。その結果、定期的、継続的な「学習」は困難になっている。

4. まとめ

CA専門職と結びついた日本語教育を考えるために、本研究では「候補CA」「新人CA」「現役CA」の三つの概念を用いた。CAのための日本語教育は一般的日本語コースとは異なり、学習目的、期間等の項目にJSPの特徴性があり、「候補CA」「新人CA」「現役CA」の段階的ごとに教育の取り組み方が異なっている。同じCAのための日本語教育とはいえ、教育体制やコースの枠組等の配慮は段階ごとにすべての条件が同一というわけではなく、とりわけ「現役CA」段階では、学習者中心の立場から「候補CA」、「新人CA」との明確的な線引きをすることができる。ただし、段階独自の課題も指摘されなければならない。たとえば、「現役CA」段階のニーズ調査を行ったが、その実践には「いつ」「何を」「どう」教えるのかといった具体的な設計についてコース構築では再検討しなければならない。これらの問題を今後の課題として探求していきたい。

キーワード：専門日本語教育、キャビンアテンダント、ニーズ調査、継続学習、

論文審査並びに最終試験の要旨

審査概要

論文の構成

- 第1章 研究の背景
 - 第2章 CAのための日本語教育に関する理論
 - 第3章 CAのための日本語教育における現状調査
 - 第4章 現役CAのための日本語コース構築
 - 第5章 考察
 - 第6章 最終章
- 参考文献

研究の成果

申請者は博士課程在籍中に調査研究を行い、その結果を下記6本の論文にまとめた。これらは本博士論文を構成する要素になっている。

- ①「1999－2019年における台湾と中国のJSP研究動向に関する調査－華芸オンラインデータベースを中心に－」『日本語日本文学論叢』第16号、P73-94、武庫川女子大学大学院（2021）
- ②「航空日本語科目から見た学科カリキュラム現状調査－台湾の大学を中心に－」『かほよとり』第17号 P37-48、武庫川女子大学大学院文学研究科（2021）
- ③「インストラクショナル・デザインの視点からのCA日本語教材分析－台湾C航空会社の日本語教材を中心に－」『日本学刊』第25号(査読誌) P65-79、香港日本語教育研究会（2022）
- ④「BCCWJコーパスを用いた「頂戴（ちょうだい）」使用現状調査」『日本語日本文学論叢』第17号 P130-148、武庫川女子大学大学院（2022）
- ⑤「生活日本語におけるオンライン教材の考察－『いろどり』と『まるごと』を中心に－」『かほよとり』第18号 P52-66、武庫川女子大学大学院文学研究科（2022）
- ⑥「CAのための日本語コース構築における日本語ニーズ調査－台湾C社の現役CAを中心に－」『かほよとり』第19号、武庫川女子大学大学院文学研究科（2023印刷中）

審査の手順

- 実施日：2023年2月14日 司会（上田主査）
- 10：30～ 論文概要説明（申請者、羅永祥）
 - 10：40～ 質疑応答1（野畑副査）
 - 11：15～ 質疑応答2（木下副査）
 - 11：35～ ディスカッション（全員）

11：50 面談の終了、委員による審査

14：15～ 2022 年度大学院日本語日本文学科専攻(修士課程・博士課程)公開口頭発表会で口頭発表、その後、専攻会議にて合否審査を行った。

口頭試問における質疑応答内容

論文概要を申請者が説明した後で、野畑副査から以下のような質問があった。

- ・本研究と JSP 先行研究との関係について説明を求める。
- ・「頂戴」論文の独自性は評価できるが、本論文全体における位置づけはどうか。
- ・宇佐美の先行研究を引いての言説で、「他者」を本研究ではどのように捉えているか。
- ・「チャンク」と「かたまり」の用語の定義づけへの見解。

続いて、木下副査から以下のような質問があった。

- ・専門職としての段階を「候補 CA」「新人 CA」「現役 CA」とした点は評価できる。
- ・専門日本語研修として「現役 CA」をどのように設計すべきと考えるか。
- ・インストラクショナル・デザイン (ID)、ガニエの 9 事象などを援用した利点は認められるが、ID 理論の示す範囲は膨大である。その点を本論文ではどのように位置づけているか。
- ・CA 専門日本に関する先行研究 (赤城、岡部) に関する言及が不明瞭である。

上記のような副査からの質問に対し申請者が回答し、さらに全体でディスカッションを行った。

審査員所見

申請者羅永祥さんは、本学大学院日文専攻在籍中の 3 年間に、上に挙げた論文 6 本を執筆し博士論文を完成させた。外国語である日本語表現との格闘だけでなく、長期休暇取得し進学した勇気と、テーマに沿って集中的に執筆し博論を完成させていった努力は称賛に値する。本論文は、「当事者による専門日本語教育研究」として際立つもので、学術的水準は高い。

本研究の成果として、次の諸点が挙げられる。

- ・専門職に対する専門日本語教育を、「候補 CA: 職に就く前」、「新人 CA: 現場に出る直前」、「現役 CA: 現場経験者」に分類し、それによって各段階の専門日本語教育の特性を明らかにした。
- ・「頂戴/ちょうだい」という日常的な日本語の運用について、申請者は日本語学習者の視点から分析し、その機能を明らかにした。そのうえで、日本語教材で扱われる待遇表現が上下関係を中心とするなかで見落としがちになる親疎関係等の人間関係、社会言語学

視点に基づく言語表現の重要性を CA という職業との関連から明らかにした。

- ・オンラインによる学習方法が発展する中で学習素材があふれている。同時に学習者像も拡大し、年齢、職業、学習歴、学習動機などあらゆる学習者が存在し、何をどう選択するかという問題も発生している。学習者の立場からオンライン学習教材の利点、不利点を指摘し、さらに教師（支援者）の果たすべき役割の変化についても言及している。
- ・本研究では、「現役 CA」という長年その職に就き、日本語との接点を持つ一個人が学習者であり運用者であることを、公的な職業人としてだけではなく私的な個人としての学習動機も重要であることを記述した。
- ・複言語話者であることが、CA という専門職の職業人としての自尊心（中文：虚栄心）・矜持とも強く結びつき、職業的アイデンティティを構成しているとの指摘も重要である。

本研究を構成する現状分析調査では、専門日本語教育の当事者研究として独自性が評価できるものの、ID 学習理論、成人学習理論などを援用した論考では、議論の深さという点でやや物足りなさがある。また、当初研究課題として掲げていた「CA のための専門日本語のコースデザイン」そのものの完成は次の課題となった。

しかし、本研究はそのための基礎的な研究と位置付けることもできる。これら諸点を考慮したうえで、本論文は博士学位に値するものであると思料する。